TAITOKAN ESTABLISHMENT HISTORY BOOK

東京都立産業貿易センター台東館

設立ヒストリーブック

浅草と共に歩んで半世紀

東京都立産業貿易センター

台東館

～はじめに～

ご挨拶

1969年（昭和44）11月、当時日本最大の展示会場として浅草の地に誕生した東京都立産業会館 台東館は、1983年（昭和58）「産業会館 台東館」から「産業貿易センター 台東館」へと改称。

2019年（令和1）11月に開館して50周年の節目を迎えることができました。（2014年（平成26）～2015年（平成27）全館リニューアル）

これもひとえに、長年にわたる地域住民の皆様のあたたかく深いご理解と、数多くの主催者、出展者、ご来場者の皆様のご愛顧とご厚情の賜物と、衷心より深謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大防止に重要な取り組みとして向き合わなくてはならない昨今ですが、これからの50年に対して、職員一同、さらなる努力により、都の産業貿易の発展とすべてのご利用者の満足度向上に寄与していく所存です。

秘話をまじえながら、これまでの半世紀の歩みを振り返る台東館の設立ヒストリーをお楽しみいただければ幸いです。

令和3年8月

東京都立産業貿易センター 台東館

職員一同

東京都立産業貿易センター

台東館

目 次

～はじめに～ ご挨拶　東京都立産業貿易センター 台東館　職員一同

［年表］ 浅草と台東館の歩み ―― 04

～浅草と台東館①～ 武蔵国浅草…推古天皇36年から ―― 06

～浅草と台東館②～ 台東館のある場所…浅草寺との関係 ―― 07

～浅草と台東館③～ 日本一の展示会場の建設…都下の商工業界の動き ―― 08

～台東館設立のルーツとは～ 台東館は第二産業会館…今はなき大手町館 ―― 09

～苦難の台東館設立秘話①～ 第二産業会館「台東館」着工…関係者の努力が結実、しかし… ―― 10

～苦難の台東館設立秘話②～ 大いなる試練…地域住民の理解を得て ―― 11

～日本一の展示会場完成～ 台東館の誕生…浅草と共に ―― 12

～さらなる苦難を乗り越えて～ 日照権侵害等損害賠償請求…太陽を奪われて ―― 14

～台東館創業当時の様子～ 創業当時の体制… 昭和の風景 ―― 15

～広告宣伝の移り変わり①～ 昭和から令和…浅草駅とその周辺 ―― 16

～広告宣伝の移り変わり②～ 昭和から令和…台東館の広告の変遷 ―― 17

～台東館の姉妹館～ 新浜松町館の誕生…国際ビジネスの発信基地として ―― 18

［年表］

浅草と台東館の歩み

1954	昭和29年10月	**都立産業会館が大手町に開館（大手町館）**
1958	昭和33年9月	浅草・池袋間にトロリーバス開通
	昭和33年10月	浅草寺、新本堂落慶
	昭和35年5月	浅草寺、雷門落慶。慶応元年の焼失以来95年ぶりの再建
1964	昭和39年	浅草演芸ホール開場
1966	昭和41年10月	**都立産業会館台東館着工**
	昭和42年12月	浅草寺裏にスペースタワー完成（1973年に営業中止）
1969	昭和44年11月	**都立産業会館台東館開館**
1970	昭和45年4月	**都立貿易センターを浜松町に開館（浜松町館）**
1972	昭和45年10月	**台東館屋上に庭園完成**
	昭和48年11月	浅草寺、五重塔院落慶
	昭和52年10月	浅草公会堂落成
	昭和53年7月	隅田川花火大会復活
1978	昭和53年7月	**台東館屋上、花火実行委員会本部会場となる**
1980	昭和55年3月	**都立産業会館大手町館閉館**
	昭和56年8月	浅草公園周辺で浅草サンバカーニバル開催
1983	昭和58年6月	**都立産業貿易センターへと組織変更、台東館は都立産業貿易センター台東館と改称**
1985	昭和60年4月	浅草文化観光センター開設
1989	昭和62年11月	伝統工芸展示館オープン
1995	平成5年4月	浅草駅前に観光案内塔完成
	平成8年5月	百数年ぶりに三社祭神輿の「庭祭礼」
1997	平成9年7月	江戸下町伝統工芸館（現・江戸たいとう伝統工芸館）開設
1998	平成10年4月	**都立産業貿易センター台東館および浜松町館の管理運営を（財）東京都中小企業振興公社に移管**
	平成10年5月	**浜松町館の常設展示場事業終了**
	平成10年10月	浅草寺宝蔵門で大わらじ架け替え

東京タワー営業開始

東京オリンピック1964開催

日本万国博覧会開催

札幌オリンピック開催

科学万博つくば85開催

東京ビッグサイト完成

阪神・淡路大震災発生

皇太子明仁親王即位「平成」に改元

東京国際フォーラム開館

長野オリンピック開催

台東館が建つ前の有料駐車場として使われていた1960年（昭和35）頃の花川戸公園

スペースタワー完成
1967年（昭和42）『戦後三十年 浅草観光連盟の歩み』所載（浅草観光連盟提供）

都立産業会館台東館
1969年（昭和44）11月1日完成

浅草サンバカーニバル1983年（昭和58）頃

伝統工芸展示館（台東区役所提供）

浅草神社「庭祭礼」（台東区役所提供）

2021	東京2020オリンピック開催	
2020	新型コロナウイルス感染拡大	
2019	皇太子徳仁親王即位「令和」に改元	
2018	豊洲市場開場	
2016	小池百合子氏都知事に当選	
2015		
2014	「富岡製糸場」世界文化遺産に	
2012	東京スカイツリー開業	
2011	東日本大震災発生	
2007	第1回東京マラソン開催	
2006	つくばエクスプレス開業	
2005	愛・地球博開催	
2000		

令和3年4月	**(公財)東京都中小企業振興公社が、産業貿易センターの指定管理者として東京都から指定を受ける(台東館)**	
令和2年9月	**都立産業貿易センター浜松町館が東京ポートシティ竹芝にて、新たに開業**	浅草～東京スカイツリータウン間に複合商業施設「東京ミズマチ®」が開業。東京スカイツリー・浅草連絡歩道橋「すみだリバーウォーク」が開通
令和2年6月		江戸たいとう伝統工芸館、リニューアルオープン
平成31年3月	**(公財)東京都中小企業振興公社が、産業貿易センターの指定管理者として東京都から指定を受ける(浜松町館)**	ふるさと交流ショップ 台東がオープン
平成29年7月	**(公財)東京都中小企業振興公社が、産業貿易センターの指定管理者として東京都から指定を受ける(台東館)**	
平成27年9月	**浜松町館、東京都の都市再生ステップアップ・プロジェクトにより閉館**	浅草寺伝法院を国が重要文化財に指定
平成27年7月		
平成27年4月	**台東館、改装が完了し運営再開**	
平成26年4月	**台東館、大規模修繕 (公財)東京都中小企業振興公社が、産業貿易センターの指定管理者として東京都から指定を受ける**	
平成24年11月		浅草駅ビルがリニューアルし、複合商業施設「EKIMISE」としてグランドオープン
平成24年4月		浅草文化観光センターがリニューアルオープン
平成23年6月		浅草東参道二天門防災船着場が供用開始
平成23年4月	**(公財)東京都中小企業振興公社、公益財団法人へ移行**	
平成20年10月		浅草寺本堂落慶50周年を記念して、浅草で二階建バスが復活運行
平成18年4月	**(財)東京都中小企業振興公社、指定管理者として都立産業貿易センターの運営開始**	
平成12年4月	**都立産業貿易センター、ホームページを開設**	
平成10年10月	**浜松町館の元常設展示場部分を日替展示場として利用開始**	

東京ポートシティ竹芝で新たに開業した浜松町館

東京スカイツリーと浅草を結ぶ「すみだリバーウォーク」

リニューアルされた都立産業貿易センター台東館

開業当時の「EKIMISE」(東武鉄道提供)

二階建バス復活運行(台東区役所提供)

～浅草と台東館①～

武蔵国浅草…推古天皇36年から

戦国時代の覇者となった徳川家康が江戸幕府を開くはるか以前から、武蔵の国の浅草は、浅草台地（微高台）に築かれた浅草寺を中心に賑わいを見せていたようです。

浅草寺は『浅草寺縁起』等にみえる伝承によると628年の推古天皇36年に、2人の漁師の網にかかった聖観音像を、地元の名士、土師中知（はじの なかとも）が自宅で本尊として祀ったのが始まりといわれています。この聖観音像は、2寸（約6cm）にも満たない白黄色の像であるといわれていて、実物は歴代ご住職も見たことがない秘仏中の秘仏。今も本堂の奥の厨子の中で神秘のベールに包まれて安置されています。すべての願いを叶えてくださるお寺として多くの参拝客を集め、コロナ禍前までは国内外から年間約3,000万人が訪れていました。

これまでの賑わいを取り戻すまでにはもう少し時間がかかるかもしれませんが、台東館では、約46万人の皆様にお越しいただいていました。

～浅草と台東館②～

台東館のある場所…浅草寺との関係

”粋でイナセな”という江戸時代の美意識に加え、”宵ごしの銭は持たぬ”という気っ風の良さや、"火事と喧嘩は江戸の花"という威勢の良さを表す言葉に象徴されるような、下町文化の中心地 ”浅草”。

浅草寺の門前町として栄えてきたこの地に建つ台東館は、浅草寺東門で国の重要文化財でもある「二天門」の前方にあります。江戸時代末期の地図をみるとこの場所には、金剛院、覚善院、法善院、妙音院、顕松院という浅草寺の寺中寺院がありました。これらの寺院は今でも場所を変えて存続しています。

その後、関東大震災や東京大空襲による被災を経て、戦後は台東区の花川戸公園となりました。ちなみに「二天門」は、これらの災火にも屈せず焼け残った貴重な建築物で、浅草神社の社殿と同じ慶安2（1649）年に建てられ、上野寛永寺にある四代将軍家綱の霊廟から運ばれた持国天と増長天が収められています。すぐそばには安永6（1777）年に「臨時連中」という浅草寺の消防組織から寄進された石製の大きな手水鉢が当時のままの姿で置かれており、江戸時代の名残りを感じることができます。

この辺りは戦前から履物問屋街発祥の地といわれ、毎年12月には、靴や履物、財布、バック、小物、アクセサリーなどが安価で販売される「花川戸はきだおれ市」が行われています。傘や文具、日用品も売り出され、”掘り出し物が見つかる！”と、大勢の買い物客で賑わいます。戦前の最盛期には下駄や草履などを扱う問屋が約250軒も建ち並び、布製ゴム底靴の中心地として栄えてきたそうです。

右の写真が撮影された頃は日本の高度成長期の真っただ中。その後この地に台東館が立てられましたが、その建設にあたっては多くの皆様のご苦労がありました。

台東館が建つ以前に有料駐車場として使われていた1960年（昭和35）頃の花川戸公園。当時の街の様子、バスや車の形もレトロで郷愁を誘われます。

日本一の展示会場の建設…都下の商工業界の動き

江戸の「履倒れ」に対して、京は「着倒れ」の地と言われましたが、台東館建設の動きと時を同じくして京都府では、京都経済の中心地である室町の京都織物商協会などが団結して、1965年（昭和40）に京都産業会館が建設されました。なお、京都産業会館は2019年（平成31）1月に「京都経済センター」として建替えられ、新しく生まれ変わっています。

台東館設立の背景も同様に、地元台東区の各協会・商工組合・団体が中心となり、都内の多くの組合や団体ともタッグを組んで、都の経済発展のため、当時の東 龍太郎知事※に何度も設立の陳情を行いました。そして「京都産業会館に負けないものを作ろう！」を合言葉に、日本一の広さ5,836㎡の展示会場を持つ台東会館建設に邁進しました。

※第4・5代の東京都知事で1964年東京オリンピックの誘致に深く関わりました。

1966年（昭和41）10月16日 読売新聞（読売新聞社様より掲載のご協力をいただきました）

讀賣新聞　第32344号

台東会館、都と共同で

敷き地難など解消

わが国最大の展示場 43年完成

全国一広い展示場面積をもつ都第二産業会館が、台東区花川戸二の六の三（浅草寺二天門前）に建設されることになった。都と同区が、十六億三千万円の工事費を分担する共同ビルで地上九階地下一階。ビルの主要部分は都の産業展示場となるが、ほかに区営結婚式場など区民施設も「台東区会館」という名で同居する。十八日起工式が行なわれ、四十二年七月完成の予定。

台東区では、さる三十八年末から、総合庁舎、産業会館建設促進本部をつくって、準備を進めていた。ところが、敷き地と予定していた区立花川戸公園の用地変更許可がおりず、計画は難航した。しかし、これに使う敷き地と同じ広さの代替公園を作ることを条件に許可がおり、また都でも、現在の千代田区大手町にある都産業会館だけでは手ぜまで、第二産業会館を建設する計画を持っていたので台東区の会館と共同ビルとすることで話し合いがつき、この計画が本決まりとなった。

建設費総計、総額十六億三千万円。このうち都が十一億千五百二十九万八千円、区が五億四百七十万二千円をそれぞれ負担、一階と中二階、それに八、九階は区が使用して台東区会館とし、地下一階と二階の一部、三階から七階までは都が使用することになっている。

区の使用する一階と中二階には、浅草を訪れる観光バス専用の駐車場で、二十五台を収容することができるが、シーズン・オフには一般にも開放される。また二階の玄関わきには約百五十㎡の画廊が予定されており、区内の各種美術団体に低料金で貸し出される。八階は、食堂と中小企業者が使う会議室が四室、九階には、区長の結婚式場と応接室ができる。この結婚式場は、低料金でかなり豪華なふんい気が味わえるよう配慮される。

一方、都が使用する中二階と三階は、トラック、乗用車の駐車場で、一階からゆるやかなスロープで三階まであがって行ける方式のもの。四階から七階までは展示場となる。合計約六千平方㍍の展示場面積は、全国一の広さといわれ、大手町の産業会館より約七百五十平方㍍広い。この都第二産業会館の高さは、九階まで三十六・五㍍、その上部にある塔屋を加えると四十九㍍になる。

全国一広い展示場をもつ東京都第二産業会館の完成予想図

ちなみに現在、わが国最大のコンベンション施設は、1996年（平成8）に開業した東京ビッグサイトです。総展示面積が約11.5万㎡あり、毎年1,400万人を超える来場者があります。当時と比べると、規模とケタ違いの大きさに驚かされます。

～台東館設立のルーツとは～

台東館は第二産業会館…今はなき大手町館

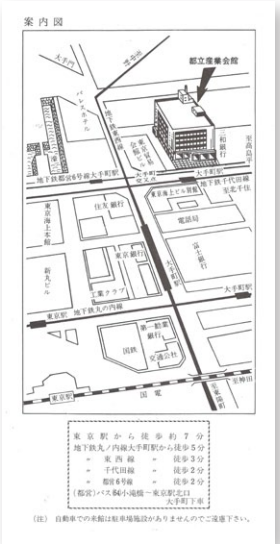
展示面積として約11.5万㎡ある東京ビッグサイトとほぼ同規模の会場が、明治時代にすでにあったことはご存知でしょうか？

西南戦争の最中、1877年（明治10）8月、初代内務卿 大久保利通の提案により、約10万㎡の上野公園に会場をつくり「第一回 内国勧業博覧会」が催されました。1873年のウィーン万博を手本としたこのイベントは、「国内の産業発展を促進して魅力ある輸出品目を育成することを目的とし、欧米からの新技術と日本の在来技術の出会いの場となる産業奨励会」との位置付けで、全国から84,000点を超える出品点数を集めて開催されたそうです。

これをきっかけにして、1878年（明治11）に東京府勧業課が知事に伺いを立て、千代田区大手町にあったとされる第一勧工場内に商品の「陳列所」を設けました。この陳列所が都における展示会場の始まりで、その後、販売成績が良いため、「東京府商工奨励館」が建設されました。

戦後は、「東京貿易館」として日本橋三越に間借りしていた時期もありましたが、都議会がその必要性を認め、1954年（昭和29）10月15日に総工費9億892万円で「東京都立産業会館 大手町館」が設立されました。
（1980年（昭和55）閉館）

昭和30年頃の東京都立産業会館 大手町館



当時の案内図をみると、大手町館は都内随一のビジネス街にあったことがわかります。

大手町館は、2F～6Fまでの４フロア、約5785㎡の展示室を有し、9時～17時の料金が１フロア82,000円/日で、現在の約1/4の料金設定でした。1966年（昭和41）には利用申込みがピークとなり、年間340日を超える稼働となりました。

日本の急速な経済成長のもと、見本市や展示会は規模においても質においてもますます拡大し、さらに複雑化する傾向が顕著となりました。東京都は大手町館だけでは需要に対応できないと判断し、第二産業会館として台東館設立の必要性を認めました。

～苦難の台東館設立秘話①～

第二産業会館「台東館」着工…関係者の努力が結実、しかし…

東京都立の第二産業会館「台東館」誘致について、上條貢（かみじょう みつぎ）台東区長※をはじめとした第二産業会館建設特別委員会、区議会議員らが、十数回にも渡って、熱心に東京都側と折衝し、やっとの思いで1966年（昭和41）10月18日の起工式開催にこぎつけました。

※上條区長は、1963年（昭和38）台東区長に就任後、1975年（昭和50）4月まで3期12年にわたり台東区の発展に貢献され、同年台東区名誉区民の称号を与えられました。

右と下の写真は、大勢の関係者や地元支援者がかけつけ、浅草神社の神主様のお祓い・祝詞奏上のあと、鍬入れ、お祝いパーティが行われた様子を伝えています。

このような起工式の賑やかな光景は今では珍しくなりましたが、当時の関係者の皆様の喜びと期待が伝わってきます。当初、台東館は2年の工期で完成を予定していました。しかし、3年の歳月を経ることに至る、幾多の試練が待ち受けていたのです。

～苦難の台東館設立秘話②～

大いなる試練…地域住民の理解を得て

1966年（昭和41）10月18日の起工式の後、早速建設工事に移り、左の写真のとおり、館を支える柱の鋼管杭102本の打込みが始まりました。

しかし工事に伴う騒音や振動等に苦情が寄せられ、工事開始1か月後、被害を受けた地域の皆様による「地元被害者対策連合会」が結成されました。工法の変更や工事の一時中止が要請されましたが、幾度も話し合いの場が持たれた結果、地域の皆様にご理解と歩み寄りをいただくことができました。そして工事が再開され、一転して「地元協力連合会」として再スタートしていただいたのです。

こうして工事も急ピッチに進み、高くそびえる外観が現われてきました。しかし、またも難題が持ち上がります。

工事開始から1年半後の1968年（昭和43）3月、台東館北側住民のご家庭を中心に、テレビの電波障害が発生しました。「地元協力連合会」からの改善申し入れに対し、東京都は改善措置として、直ちに受信障害防除対策工事を施行しました。そしてようやく台東館が完成することになります。

※左の写真の”以前の様子”は、P07の写真でご覧いただけます。

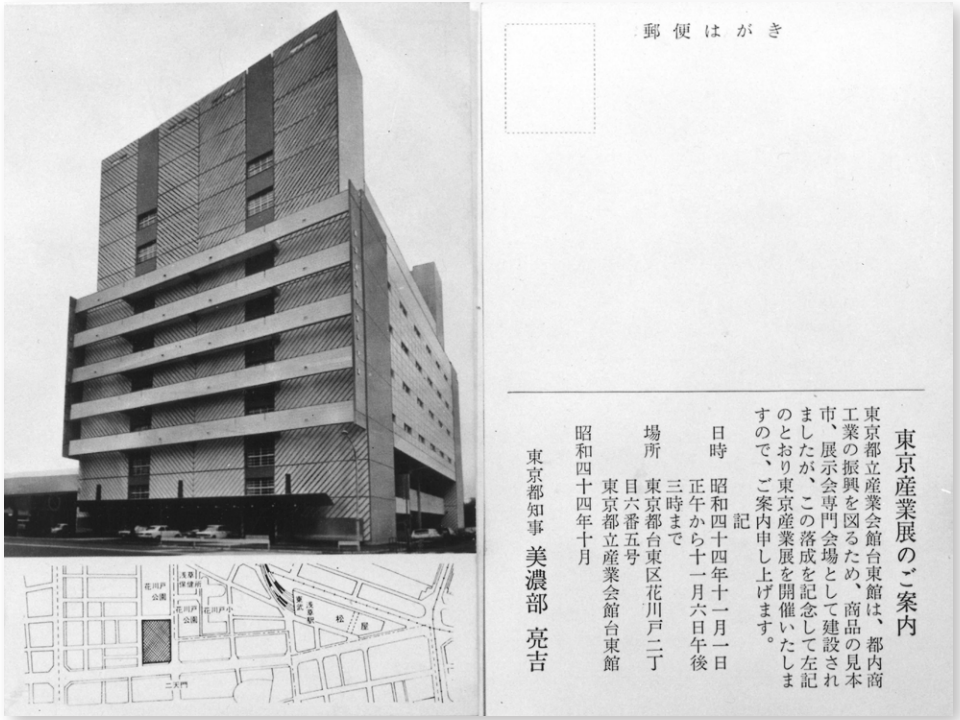
～日本一の展示会場完成～

台東館の誕生…浅草と共に

3年の歳月と総工費16億7,700万円を費やした台東館が1969年(昭和44)11月1日、ついに完成し産声をあげました。下のはがきは、第6代の東京都知事として2年目の任期に入った美濃部亮吉知事による台東館の落成記念として6日間行われた「東京産業展」の案内状です。

初日は、先端工法の柱1本で作る「大スパントラス無柱構造」が採用された展示室に地元住民の皆様40名も招待され、台東区と合同の盛大な落成式典が挙行されました。(この頃から少しずつカラーフィルムが普及し始めたようです)

この催しが始まりで翌年には利用日数が295日となり、大手町館と共に多くの催事が行われ、台東館は国内見本市・展示会場の”メッカ”と呼ばれ、広く海外まで知られるようになりました。



郵便はがき

東京産業展のご案内

東京都立産業会館台東館は、都内商工業の振興を図るため、商品の見本市、展示会専門会場として建設されましたが、この落成を記念して左記のとおり東京産業展を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

記

日時　昭和四十四年十一月一日
正午から十一月六日午後
三時まで

場所　東京都台東区花川戸二丁
目六番五号
東京都立産業会館台東館

昭和四十四年十月

東京都知事　美濃部　亮吉

ちなみにこの年は、東京大学で安田講堂占拠事件が起こり、アメリカでは宇宙船アポロ11号が人類初の月面有人着陸に成功しました。多くのテレビ局が開局し、街にも多くの電気店ができて、日本のテレビの生産台数が世界1位になった年でもありました。

右上の写真は、1971年（昭和46）頃の様子です。当時も”馬道通り”の交通量は多く、台東館の屋上には多くの百貨店でも上がっていた「アドバルーン」が見られます。江戸時代はこの道を利用し馬で吉原へ向かう多くの遊客で賑わったそうです。またこの通りには、今も戦前から続く老舗が数多く残っています。2016年度（平成28）には7年の事業期間を経て無電柱化され、歩道が広く使えるようになりました。現在では、すっきりと見通しの良い、美しい街並みの形成がすすめられています。

右下の写真は、1981年(昭和56)から始まった毎年8月に行われる日本で最大のサンバカーニバルコンテストである「浅草サンバカーニバル」(令和2、3年は中止)の様子で、台東館がこのパレードのスタート地点となっています。(写真は1983年(昭和58)頃)

日照権侵害等損害賠償請求…太陽を奪われて

グランドオープンして3か月が経過し、“順調にスタートできた！”ように見えた台東館でしたが、右記のような悲しい記事が、1970年（昭和45）2月8日の朝日新聞東京版に躍りました。「昨年秋、年老いた父母が、相ついで死んだが、せめて一日だけでも干して、ホカホカになった布団に寝かせてあげたかった」台東館に太陽を奪われた娘さんの嘆きに、世間は驚きました。

この記事が出た半年後、1970年（昭和45）7月31日に日照権侵害等損害賠償請求が、東京都、台東区、建設会社に対して提訴されました。しかし、双方が誠意を持って粘り強く話し合いを続けた結果、8年の歳月を経て、1978年（昭和53）9月14日に和解が成立しました。

今では泥棒に布団を盗まれることはありませんが、布団が財産だったこの時代、初代台東館館長の小林福一郎は、「せめて干した布団を…という話を聞いたとき、胸がジーンときた。館の利用規定があるので毎月はできないが、せめて2か月に1度くらいは開放したい」と、規定範囲を超えて、館の屋上開放の決断をくだしました。

その後も地元との会合を重ね、日当たりの悪くなった住民のための屋上開放や、冬の雪かき作業など、地元に溶け込むための努力が積み重ねられました。今も浅草の人口密集地における公共施設として、地元との共存の道を歩んでいます。

こちらの2点の新聞記事につきましては
著作権の関係上、掲載しておりません。
台東館内に配架中の
「台東館設立ヒストリー小冊子」にて
ご覧いただくことができます。

1970年（昭和45）2月8日 朝日新聞

1970年（昭和45）2月9日 朝日新聞

～台東館創業当時の様子～

創業当時の体制…昭和の風景

創業当時の職員は、庶務係5名、業務係7名、館長1名の計13名の体制でした。現在は施設管理グループが加わり、14名の体制で運営しています。1Fには東京商工会議所台東支部と警備室、3Fに台東館の事務室があり、8Fに上野精養軒、9Fに台東区民会館事務室が入居し、皆様のご来場を万全の体制でお待ちしております。

現在の職員の机上にはパソコンが置かれ、IT機器がところ狭しと並んでおり、ご利用者専用のビジネスコーナー（有料のパソコン、複合機設置）も設けています。右上の写真は、当時の3階事務室の様子です。パソコンの代わりに大きな黒板にチョークで書き出して情報共有を図っていたようです。また各所に観葉植物が置かれ、水槽で金魚を飼育して、癒しの空間をつくっていた様子もうかがえます。昭和のあの頃は、自宅でも玄関やリビングで金魚や熱帯魚を飼う家庭が多かったことが思い出されます。

右中の写真は1971年（昭和46）頃の台東館職員の集合写真（職員が撮影したもの。顔にボカシを入れて掲載）です。服装や髪型、そして背景の植栽からも昭和を感じることができます。台東館の屋上は、1970年（昭和45）10月20日に日本庭園として造成後、開放し、来場者や浅草地域の皆様の憩いの場として親しまれていたようです。（現在は、安全保安上、開放しておりません）

また右下の写真は松屋デパート浅草店（1931年（昭和6）竣工）屋上から北の方向を撮影した写真です。台東館の屋上から植栽の頭が出ているのがわかります。当時は遮る高い建物も無かったため、台東館の南側の壁に貼り付けられた箱文字看板を設置していました。

手前には、1930年（昭和5）に完成し、東京大空襲の戦火を免れた3階建ての浅草小学校（現在の校舎は1984年（昭和59）建替え）が見えます。台東館の後方（北側）には、今では少なくなった煙突や工場から煙が上がっていて、高度成長の真っただ中にあった様子を今に伝えています。

～広告宣伝の移り変わり①～

昭和から令和…浅草駅とその周辺

さてここからは、昭和の時代と現在の浅草駅やその周辺の移り変わりを、広告や看板という切り口からご覧いただこうと思います。

写真1は1975年（昭和50）頃の東京地下鉄浅草駅銀座線東武口改札の風景で、台東館の電飾看板が大きく掲げられていました。まだ切符を切る駅員が配置されていて、昭和の温かみが感じられます。

写真2は、同じ場所から撮影した現在の自動改札の風景です。広告物がなくなり、シンプルにユニバーサル化された銀座線のイエローカラーが目に飛び込んできます。

写真1

写真2

写真3は、上記の改札口を手前に上がり、左手の馬道通りに出た7番出口から撮影した写真です。新仲通り入口信号の真下に台東館の看板が見えます。

同じ位置から撮影した今の写真4を見ると、お店も変わり、ビル化が進んで、街が変貌していく様子がよくわかります。ここから台東館は右方向にまっすぐ歩いて5分です。目の不自由な方は、音声地図サービス※を利用してお越しいただけます。

また、写真4には写っておりませんが、この場所に立つと昭和感あふれる台東館の看板がまだ残っておりますのでぜひ見つけてください。なお、この写真の左方向に行くと「酔いの早く発するのは、電気ブランの右に出るものはないと保証し・・・」と、太宰治の名著『人間失格』にも出てくる、浅草では最古の鉄筋コンクリート造の建造物で2011年（平成23）に国の登録有形文化財に登録された名店があります。

写真3

写真4

□ 赤枠が、当時の台東館の看板設置場所

浅草寺にお参りする場合は、写真左の新仲見世のアーケードを抜けると、南北250m、88の店舗が並ぶ仲見世通りに出ます。これを右に曲がると正面に宝蔵門、本堂が見えてきます。スタッフ一同、みどころ満載の浅草にある「東京都立産業貿易センター台東館」でお待ちしています。

※視覚障がい者等のための音声地図サービス(英語にも対応)をご利用いただけます。
（銀座線 、東武スカイツリーライン、都営浅草線の各浅草駅出口～台東館まで）
利用概要：https://www.amedia.co.jp/product/smartphone/app/navirec/

～広告宣伝の移り変わり②～

昭和から令和…台東館の広告の変遷

現在の壁掛け広告はデジタルサイネージが主流となり、数秒から十数秒間表示されるもので、写真2は新宿駅西口や同じく4号街路で掲示した例です。

昭和から平成にかけての時代は、浅草駅には写真1のように駅の柱に掲げられ、上野駅や人形町駅などに写真3、4のような電飾看板が設置されていました。

2000年（平成12）から公式ウェブサイトの公開により広告看板は順次外されました。

以下の看板をみると、ロゴやデザイン、媒体が洗練されていき、時代の流れを感じます。

写真3、4の看板は、裏で蛍光灯が光っているのがわかりますが、写真5のものは裏でLEDがムラなく表示させるよう点灯しています。

写真1

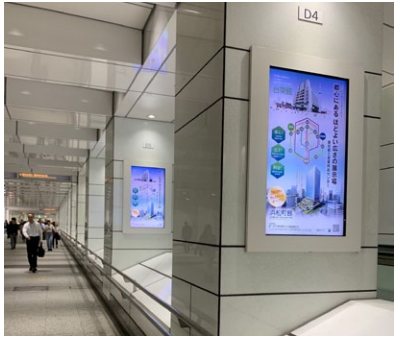


写真2

写真3

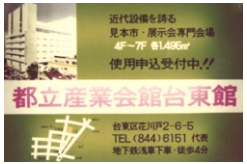


写真4

写真5

1980年（昭和55）大手町館の閉館に伴い、1983年（昭和58）6月に港区海岸の都有地に港区商工会館との合築により、浜松町館が建設されました。そして、2015年（平成27）に閉館となった浜松町館は、2020年（令和2）9月14日、新たにオープンしました。

～台東館の姉妹館～

新浜松町館の誕生…国際ビジネスの発信基地として

1980年（昭和55）3月末で大手町館は老朽化等により、閉館となりました。これに代わる施設として、関係業界から中小企業の貿易振興と国内販路開拓事業を合わせて行う施設の設置要望が高まり、1983年（昭和58）6月に竹芝地区の都有地に浜松町館（右の写真）が建設されました。

浜松町館は、2015年（平成27）9月30日に閉館となり、竹芝地区再開発のため取り壊されました。

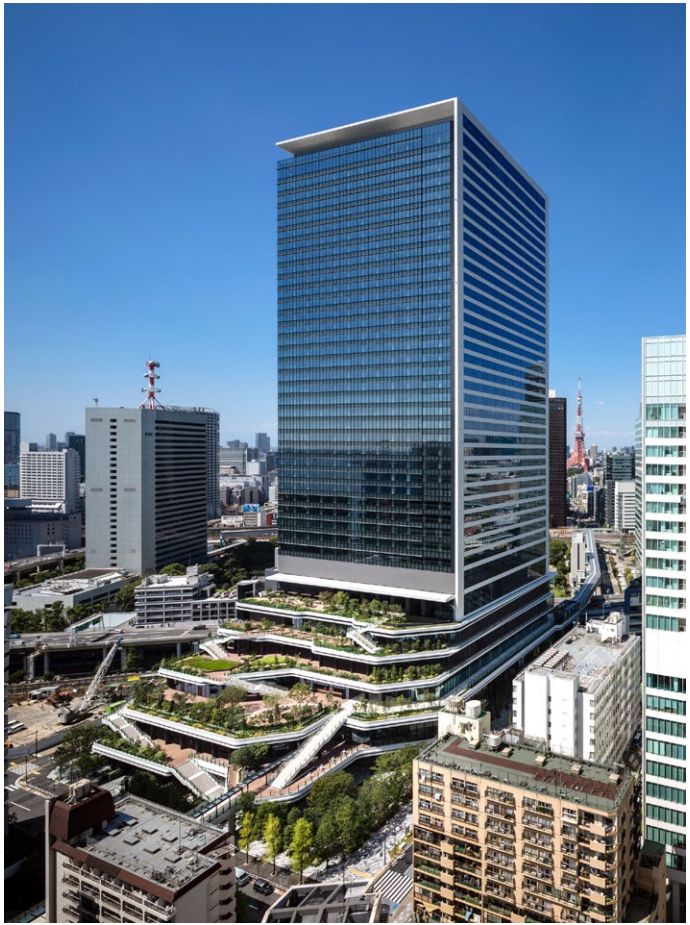
これを機に内外販路開拓を一元的に推進する組織として「東京都立産業貿易センター」と改められ、浜松町館が本館と位置付けられました。そして1998年（平成10）4月1日、東京都行政改革大綱における運営見直しにより、（財）東京都中小企業振興公社に浜松町館と台東館の管理運営や建物維持管理業務が委託され、両館体制が確立しました。

2003年（平成15）地方自治法の改正により、「公の施設」の管理を広く民間事業者や団体に開放して委託できる「指定管理者制度」がスタート。これまでのたゆまぬ利用者へのサービス向上とムダの排除が都の審査基準を満たし、戦略的な自己改革を遂げながら現在に至ります。

その後、2014年（平成26）5月に、東京都9区等を含む5区域が国家戦略特別区域に指定されたことを受け、翌年1月16日の東京都都市再生分科会において、事業者から提案された国家戦略都市計画建築物等整備事業として竹芝地区の再開発が決定しました。プロジェクト名は、「都市再生ステップアップ・プロジェクト（竹芝地区）」。東京都公文書館、東京都計量検定所、浜松町館の各跡地約1.5haが再開発の対象となり、浜松町館は、右頁写真の「東京ポートシティ竹芝（TOKYO PORTCITY TAKESHIBA）」と名付けられた、オフィスタワー（東京都港区海岸1丁目に新設する地上40階、地下2階、高さ208.83m、延べ面積約18万㎡の超高層ビル）へ大手通信会社などと共に入居し、2020年9月14日に無事開業（展示室・会議室は2F～5F）を果たしました。現在、浜松町、竹芝、芝浦の3つのエリアが力を合わせて「東京ビジネスイベンツ先進エリア」としてMICE※誘致活動を強力に推進しています。

歴史と文化が香り、世界から人が集う観光の地にある台東館、そして世界に向けて情報発信し、イノベーションとこれからの未来をイメージさせる新たな国際ビジネスの拠点にある浜松町館の今後の飛躍にぜひ、ご注目ください。

※Meeting（会議・研修・セミナー）、Incentive tour（報奨・招待旅行）、Convention or Conference（大会・学会・国際会議）、Exhibition（展示会）の頭文字による造語。ビジネストラベルの1スタイル。



東京ポートシティ竹芝（TOKYO PORTCITY TAKESHIBA）

※上記はイメージ図となります。

台東館設立ヒストリー ”浅草と共に歩んで半世紀”を
最後までご覧いただき、誠にありがとうございました。
また、このブックレットを製作するにあたり、多くの皆様や各社、
関係各位のご協力を賜り、心より御礼申し上げます。
今後とも東京都立産業貿易センター 浜松町館・台東館を
よろしくお願いいたします。

東京都立産業貿易センター台東館
設立ヒストリーブック

浅草と共に歩んで半世紀

令和3年8月発行
編集・発行　公益財団法人 東京都中小企業振興公社
東京都立産業貿易センター 台東館
〒111-0033 東京都台東区花川戸2-6-5
TEL 03-3844-6190　FAX 03-3843-6707

TAITOKAN ESTABLISHMENT HISTORY BOOK

東京都立産業貿易センター

台東館

https://www.sanbo.metro.tokyo.lg.jp